



表通り裏通り

硬式野球に かける女子大生



新谷監督が「攻撃も守備もバランスとれたチーム」と評する、尚美学園大学女子硬式野球部。9月27日、関東女子硬式野球秋季リーグ戦での様子



先制点を取られた直後、新谷監督から指示が飛びます

女子硬式野球をご存じでしょうか。試合が七イニング制であること以外は、高校野球などと変わりはありません。白球を追いかける姿は、なかなか迫力があります。

市内にある尚美学園大学には、全国の大学でも珍しい、女子硬式野球部があります。現在二十三人が在籍しています。選手の皆さんの多くは、ソフトボールや少年野球の経験者。中には、大学から野球を始めた方も……。チームを率いるのは、元プロ野球選手の新谷博監督。「野球の指導に興味があり、そのための勉強をしていたときに監督就任を要請されました。大学初の女子硬式野球部というのも、魅力を感じました」と就任当



ランニングホームランを打ち、笑顔でホームイン

時を振り返ります。

創部時から、試合で負けないことを目標に取り組んできた同部。三年目のことし、全日本女子硬式野球大会を制し、日本一に輝きました。昨年の同大会では、予選敗退。

ことしは優勝を目標に、大会に臨みました。「優勝を意識して試合に臨んだので、結果を出せたことがうれしかったです」と同部の選手兼ヘッドコーチを務める新井純子さん。また、その後行われた第三回女子野球ワールドカップの日本代表に、新井さんを含め五人が選ばれ、日本の初優勝に貢献しました。

日本一のチームだけに、厳しい練習をしているのかと思つたものの、音楽を流し、選手の間にはリラックスして練習している様子。練習は、



9月27日、対平成国際大学戦で勝利を収め、あいさつをする尚美学園大学女子硬式野球部の皆さん

時間が限られているため、打撃中心の日・守備中心の日に分けていきます。

現在、関東女子硬式野球秋季リーグ戦が開催中です。同部は、同リーグ戦の四期連続優勝を目指しています。春のリーグ戦から同部は、レギュラー組と若手組の二チームで参加しています。「多くの選手に経験を積ませるため、二チーム出しています」と新谷監督。九月二十七日現在、レギュラー組は三戦無敗。優勝を目指しての戦いは、十一月まで続きます。

「自分たちのまちは、自分たちで守る」、消防団がPR

9月6日、月越小学校で「消防・救急・地域防災フェア」が行われました。市消防団第一・第二・第三分団が、地域の皆さんの防災意識を高めるとともに、消防団の活動を



女性消防団員の皆さんがAEDの使い方を説明

紹介するために開催しました。会場には、地震体験車やはしご車の体験搭乗・応急救護訓練・消火訓練などのコーナーがあり、およそ300人の皆さんが参加。「初めての開催でしたが、多くの皆さんの参加があつてよかったです。今回体験をしたことで、いざというときに慌てずに行動できればと思います。また、消防団がどのようなことをしているかを知ってもらい、団員増加につながることを期待しています」と第二分団団長の柳沢松男さん（49歳・連雀町）。



親子でホースを持って、消火訓練に挑戦

が、多くの皆さんの参加があつてよかったです。今回体験をしたことで、いざというときに慌てずに行動できればと思います。また、消防団がどのようなことをしているかを知ってもらい、団員増加につながることを期待しています」と第二分団団長の柳沢松男さん（49歳・連雀町）。

ホ口を背負って練り歩く

古尾谷八幡神社（古谷本郷）で9月14日、県指定無形民俗文化財のほろ祭が行われました。地域の男子小学生4人がそれぞれ、およそ7kgあるホ口を背負って歩きます。このホ口は、桃色の紙でできた花を付けた36本の竹ひごを束ね、それをかごに差した物です。一步踏み出すごとに、周りから「よいしょ」とかけ声が飛びます。踏み出すと同時にホ口がふわっと広がり、とても大きな花が咲いたよう。大人たちに励まされ、目的地の御旅所に着くと、子どもたちは大きな拍手を浴び、ほっとした表情を見せていました。



ホ口を背負い、一歩ずつ進んでいきます



自分自身を好奇心と語る東郷さん

「季節の移ろいを感じながら、創作に意欲的な東郷さんは「俳句はやめられません」と眼を輝かせていました。

健康の秘けつを伺ったところ、「お酒を飲まず、たばこを吸わなかったことと、好き嫌いなく何でも食べることでしょいか」というお答え。

東郷寿美さん（99歳）
花鳥賊の差し入れのあり誕生日
ことし数えて百歳を迎えた、東郷さん。それを記念して、俳句集を発行しました。冒頭の句は、その中の一つで、ことしの作品です。

俳句との出会いは、五十年ほど前。女学校時代の友人に誘われたのが、きっかけとなりました。「初めは、見たものを五・七・五に当てはめていました。今では、五・七・五の中で何を伝えるべきかがわかってきました」と語る東郷さん。

これまでに、数え切れないほどの俳句を作ってきました。生まれも育ちも川越という東郷さんの俳句の多くは、川越が題材になっています。「以前は、吟行でいろいろな所に行っていました。最近では市内を題材にしています」と東郷さん。散歩の時などに見つけた題材をもとに俳句を作っておき、俳句会の会報に投稿をしています。

